ユニバーサルデザイン研究部会

コロナ禍の時代にユニバーサルデザインを再考する

●keywords
オフィス　ワークプレイス　ウェルビーイング　ユニバーサルデザイン
ダイバーシティインクルージョン　オードリー・タン
障害者差別解消法　SDGs　ESG

似内 志朗（部会長）
JFMA理事・フェロー
ファシリティデザインラボ 代表
認定ファシリティマネジャー
一級建築士

サマリー　この5年ほど、当部会は、部会長の似内が健康経営タスクフォース、SDGsタスクフォースの座長を兼任したこともあり、「人」を中心に考えるというユニバーサルデザインとの分野的な親和性が高いため、活動が重複した。しかし2020年度からコロナ禍に見舞われたことも契機となり、改めてユニバーサルデザイン研究部会の原点とも言える障がいを持つ者など困難を抱えて働く人々の視点に立ち、当事者の話をじっくりと聴くという試みを行うこととした。当部会のアドバイザーである森山政与志（生活環境・企画設計工房主宰）が中心となり、2020年度の後半に夜9時から90分間、生活環境・企画設計工房との共同企画で6回の「UDナイトトーク（リモートによる対話・鼎談）」を行った。そして2021年度には11回の対話・鼎談を企画・実施している。「コロナ禍の夜長」ならではの時機を得たイベントとなった。

活動内容　当部会は「ワークプレイスへのユニバーサルデザイン導入の価値を明らかにし、ユニバーサルデザイン導入の道具立てをつくる」という変わらないミッションを掲げて、これまで、調査・研究・専門誌執筆・シンポジウム主催、コンサルティングなどを行ってきた。R4発刊からの2年間（2019.7-2021.6）には、FMフォーラムにおける発表、秋の夜学校、定期的な意見交換、ウィキペディアのワークプレイスのUDに関する執筆（川内美彦、関根千佳氏らと協働）などを行い、2020-21年度は上述のUDナイトトークを実施。

成　　果　部会発足2003年から、オフィスのユニバーサルデザインを実現する3つの手法、① UDガイドライン、② UD総合評価手法（CASUDA）、③ UDレビューの考案。調査研究報告書としては、「オフィスのユニバーサルデザインに向けて」（2004）、「ユニバーサルデザイン総合評価手法」(2006)、「オフィスのユニバーサルデザイン導入事例」(2008)、「オフィスのユニバーサルデザインを語る」(2010) を発刊。2013年度からはダイバーシティをテーマとし、シンポジウム記録集「ダイバーシティの時代」(2014) を発刊。

メンバー

部会長：似内 志朗　ファシリティデザインラボ

副部会長：仲田 裕紀子　コンセプトライン　児玉 達朗　大熊町

部会員：塩川 完也　大手町ファーストスクエア　髙原 良　TATAMI　中島 秀美　ワークショップマナ

アドバイザー：森山 政与志　生活環境・企画設計工房

事務局：成田 一郎　JFMA

UD ナイトトーク
改めてユーザー当事者の目線に立つこと

コロナ禍緊急事態宣言下における「原則在宅」という状況の中、「UD ナイトトーク」という新しい試みを行った。2020 年9 月から当研究部会の中心メンバーの一人である森山氏（生活環境・企画設計工房）と部会の共催という形で、「コロナ禍の夜長」にふさわしく夜9 時から90 分、森山さんのトークとその対談・鼎談の相手として毎回ゲストをお呼びし、部会メンバーと共に時間をシェアしようという企画だ。49 歳の時に左半身麻痺となり、その後、リハビリを経て復職し、退職まで16 年間、障がいを持ったワーカーとして働いた経験から、ワークプレイスのユニバーサルデザインを再度、見直してみようという趣旨で「UD ナイトトーク2020　左半身不随で一級建築士の森山政与志による連続夜話」を、今年2021 年3 月まで6 回行った。当初一桁だった参加者も、最終回には24 名となった。2021 年度は、障がい者当事者を含め、ユニバーサルデザインに関わりのある方々をスピーカーに迎え、「マイ・ストーリー ～多様性と個性、相反する葛藤の中で～　十一話」を森山氏を軸として、ゲスト2-3 名を交えトークする内容とした。実施内容は次の通りである。

① UD ナイトトーク2020「左半身不随で一級建築士の森山政与志による連続夜話」

- 第1 話「馬鹿言ってんじゃねえ、まだ始まってもいねえ」成田一郎／9 月23 日（水）
- 第2 話「どうしたら一人でも増やせるのだろうか?」坂本崇博、木原隆明、仲田裕紀子／10 月21 日（水）
- 第3 話「輝ける未来は過去をも変える」古阪幸代／11 月25 日（水）
- 第4 話「リモートワークを体験して」黒木正郎、松崎駿、児玉達朗／12 月16 日（水）
- 第5 話「今じゃ、笑える話さ」星川安之／1 月20 日（水）
- 第6 話「コロナ禍に生きる次世代と考えるUD」波多野弘和、石川由佳子、塩川完也／2 月17 日（水）

② UD ナイトトーク2021「マイ・ストーリー ～多様性と個性、相反する葛藤の中で～十一話」

- 第1 話「障がいも一つの個性として生きて来た」森山政与志／坂本崇博・黒須美枝・似内志朗／5 月6 日（木）
- 第 2 話「尊厳なきバリアフリー」川内美彦（元東洋大学教授）／仲田裕紀子, 似内志朗／6 月9 日（水）
- 第 3 話「私がやりたいこと」　中澤信（バリアフリーカンパニー）／児玉達郎、似内志朗／ 7 月 7 日（水）
- 第4 話「コミュニケーションについて」　松森果林／足立研、今泉佳祐／8 月11 日（水）
- 第5 話「ランドスケープ論」　佐々木葉二（ランドスケープアーキテクト）／黒木正郎、波多野弘和／9 月8 日（水）
- 第6 話「形にする前の大事なこと」　成田一郎（JFMA）／古阪幸代、児玉達郎／10 月6 日（水）
- 第7 話「私と共用品とのかかわり」　星川安之（共用品推進機構）／塩川完也、曽川大／11 月10 日（水）
- 第8 話「女性が社会で働くということ」古阪幸代（WFM）／中島秀美、仲田裕紀子／12 月8 日（水）
- 第9 話「コロナ後の働き方の行方」坂本崇博（コクヨ）／堀雅木、山本英史／1 月5 日（水）
- 第10 話「建築」はどこへ向かうのか」黒木正郎（建築家・日本郵政）／似内志朗、松崎駿／2 月 9 日（水）
- 第11 話「デザインとは何か」田中一雄（GK グループ）／黒木正郎、似内志朗／3 月 9 日（水）

UD ナイトトークでの新たな気づき

これまでの当研究部会は20 年近く活動を細々と続けてきたが、コロナ禍での「親密な交流」を意図したUD ナイトトーク（昨年度と今年度前半）で、新たな気づきがあった（参加メンバーからの声を集約）。

- ユニバーサルデザインの概念（定義）も、新しい時代でいま一度見直す必要がある。
- ユニバーサルデザインは価値創造への障害を取り除くための投資である。
- コロナ禍による在宅勤務は健常者と障がい者の仕事上の垣根を低くした。
- リモートでのトークでは障害の有無はほとんど感じさせない。技術の発達がバリアを取り除くことを実感した。
- 障害の有無に関わらず、その人の持つコンテンツがより大きな意味を持つことも実感。
- バリアフリーとはあくまで手段。目的は多様な人々の「人権の保障」。
- 障害者差別解消法の合理的配慮の民間義務化には大いに期待している。
- 日本はハード面のバリアフリーは進んでいるが、人権や尊厳という面では大きく遅れている。
- 障がいを持つ人に対しては、思いやりや優しさよりも「個人としての尊厳」が重要。
- 政府は、障がい者に関して「人権」の問題を回避し、ハードの問題に矮小化する傾向がある。
- セパレート（分離）ではなくインクルーシブ（まぜこぜ）が望まれる。
- 公共の場で障がい者に声をかけにくい日本人独自の文化的障壁を変える必要。
- UD ナイトトークのようなさまざまな当事者の話を聴くことで、気づかされることが多い。
- SDGs の時代に新しいユニバーサルデザインのフレームワークが求められているのではないか。

注目すべきオードリー・タンのインクルージョン思想

コロナ禍の一年として記憶されるだろう2020-2021年。日本は幸い欧米各国と比較すると東・東南アジア・オセアニア各国と共に、幸いにも死者数も少なかったが、その中でも台湾はデジタルを最大限活用した感染防止の素早い対応により、他国のようなロックダウンや飲食店・学校などの強制休業を行わずに済み、したがって防疫と共に経済的打撃を最小限に抑えることができている。オードリー・タン氏はそのデジタル面での防疫を含む社会のデジタル化を統括する「天才大臣」として名を馳せた。しかしながら、氏の真骨頂はむしろデジタル化という人類の進歩に欠かせない革新において、高齢者やブルーカラーに属するデジタルと遠い存在の人々を「決して置き去りにしない」という「インクルーシブ」の重要性への骨太の施策である。これまで、氏はこうした考えを、著書、プレゼンテーション、YOUTUBE などで発信してきた。著書「デジタルとAI の未来を語る」の中で、次のように言う。

「私はデジタルから遠い人たちがいつかいなくなるとは思っていません。『デジタルを学ばないと時代に遅れてしまうよ』という態度は絶対にとりたくなく、その姿勢をずっと堅持していました。（略）誰も置き去りにしないインクルージョンの力を確保しなければならないのです。（略）デジタルサービスを発展させていこうという場合に、年配者やブルーカラーの人たち、そして将来を担う次

世代の若者たちを犠牲にすることはないでしょう」

「もしも高齢者が不便を感じるのであれば、それはプログラムの問題であったり、端末機器の使い勝手が悪かったりするからでしょう。そんな時はプログラムを書きかえ、端末を改良して、高齢者が日頃の習慣の延長線上で使えるように、作り方を工夫すればいいのです。つまり、高齢者に合わせたイノベーションを行うのです」

現在のようにコロナ禍が、働き方の変化と共に、DX（デジタル変革）とSX（サステナビリティ変革）の時代へのシフトに伴う産業構造の変革を加速させている現在、社会的包摂の重要性と、高齢者・障がい者などやブルーカラーを含めた「時代の流れに置いてきぼりを食いそうな人々」に対して、私たちが取るべき姿勢をオードリータン氏は示していると言って過言ではない。こうした変化の時代に「誰一人取り残さない」というSDGs の社会的包摂についての基本的姿勢と方法論を氏が示している。そして、当研究部会が長く携わってきた「ユニバーサルデザイン」の有効性を確信するとともに、取るべき方向性を、いま一度、考えるきっかけを与えてくれるのだと思った。社会の変化が加速する時こそ、ユニバーサルデザインの役割は大きい。

コロナ禍が続く2021、今後の取り組み

ユニバーサルデザインを取り巻く状況は変わりつつある。一つは、元々日本には馴染みのなかった「インクルーシブ」という概念の徐々なる浸透である。SDGs が繰り返し説くインクルーシブへの理解、ジェンダーが世界の中で落第点がついていることへの驚き、最近紙上を賑わせる責任ある立場の方々のジェンダーに関する問題発言と、世界と日本の価値観の差への気づきが徐々に進んでいる。日本は差別のない平等な社会であるという根拠が、実は狭い認識に立脚していたこと、その「平等」も格差拡大で崩れつつあることに多くの人が気づきはじめた。多様性を寛容するインクルーシブな社会こそがゴールであり、ユニバーサルデザインは手段である。

もう一つは、コロナ禍を契機とする働き方の根本的な見直しである。一斉に通勤する、出社するといったことが、その意味を含め根本的に再考されている。恐らくこの先には「広義のABW(Activity-based Working)」が定着していくだろう。高齢者、障がい者、子育てや介護に忙しい人など、さまざまな事情のある人たちも、在宅やオフィスやサードプレイスなど「いつでも、どこでも」の働き方を選択できるようになる。そもそもユーザーが働く環境と場所と時間をカスタマイズできる「いつでも、どこでも」の働き方が可能となれば、多くの問題（制約）はなくなる。広義のAPW はさまざまな制約を抱える人々を自由にして、その可能性を広げることにつながるだろう。

ユニバーサルデザインの観点から、ワークプレイス、ワークスタイルの深化は加速している。さらに先述のオードリー・タンの目指す「すべての人が等しく参加できるデジタル民主主義」の社会へと進化していければ、バリアフリー、ユニバーサルデザインといった言葉も不要となる。コロナ禍とSDGsを経て、ユニバーサルデザインにも「新しい器」が必要な時期なのだと思う。

そのために「当事者の言葉」を聴くことで、ユニバーサルデザインの原点にいま一度立ち戻ることが有効なのだと思う。新しいユニバーサルデザインのあり方を求めるための助走期間としたい。◀

UDトーク開催模様